樊雪餘閒　第一

15
1560
1

WED
十一月
1960
37 5243

門 15
號 1560
卷 1

昭 年 月 日 寄贈 氏

37 5542

目次

一 熊澤先生君子小人之解
一 親公正行ヘノ書置
一 中將姫山居之語
一 義人佐倉宗五郎訴狀
一 メダカノ子
一 豆腐記
一 左兵衛五郎ノ事
一 象戲ノ駒ノ銘
一 救荒一助、土ヲ食物トスル實驗
一 蠅取草ノ話
一 里塚ノ話
一 東照宮遺訓
一 菅公ノ小話
一 勾當內侍小話
一 徽宗皇帝畫學試題ノ話
一 八王子五日市ノ風俗
一 モールス氏ノ話
一 蒟蒻記
一 泰西畫起原沿革
一 門松、鏡餅、万歲、初夢
一 并ニ七福神ノ事
一 二宮尊德ノ話
一 大德寺亀鑑
一 曾呂利新左衞門話
一 固体膨脹ノ實用

0 004

登雪餘聞第一

熊澤先生君子小人ノ解

或人熊澤先生ニ問テ曰ク士ハ賢ヲ希フト承リ候間古ノ賢人ノ行蹟ヲ似セ候ヘ共及ヒ難ク候偶マ少シ學ヒ得タル樣ニテモ心根ハ凡夫ニテ候外君子ニシテ内小人トヤ可申候イカヽ受用可仕候ヤ先生答テ曰ク予近比古ノ賢人君子ノ心ヲ察シ自己ニ備ハレル所テ見テ學舍ノ壁ニ書付置キ小人ヲ離レテ君子トナルヘキ一助ニ致シ候ヲ則寫シ進覽イタシ候

君子

一仁者ノ心動ナキ「大山ノ如シ無欲ナル故ニ能ク靜カナリ

一仁者ハ太虛ヲ心トス天地万物山川河海皆吾有ナリ春夏秋冬幽明晝夜風雷雨露霜雪皆吾カ行ナリ順逆ハ人生ノ陰陽ナリ死生ハ晝夜ノ道ナリ何ヲカ好ミ何ヲカ惡マン義ト共ニ從ヒテ安シ

一智者ノ心留滯ナキ「流水ノ如シ穴ニ滿チ低キニ就キテ終ニ四海ニ達ス」意ヲ起シオ覺ヲ好マス万支不得已シテ應ス無支ヲ行ツテ無爲ナリ

一智者ハ物ヲ以テ物ヲ視ル已ニ齊シカラン「ヲ欲セス故ニ周シテ比セス小人ハ我ヲ以テ物ヲミル已ニ齊シカラン「ヲ欲ス故ニ比シテ周セス

一君子ノ意思ハ内ニ向フ已獨リ知トコロヲ慎ムテ人ニ知ラレンヲ求メス天地神明ト交ル其人ガラ光風霽月ノ如シ

一心地虚中ナレハ有スル「ナシ故ニ問フ「ヲ好メリ勝レルヲ愛シ劣レルヲ憐ム富貴ヲ羨マス貧賤ヲ侮ラス富貴ハ人ノ役ナリ上ニ居ルノミ貧賤ハ易簡ナリ下ニ居ルノミ富貴ニシテ役セサレハ亂レ貧賤ニシテ易簡ナラサレハ敗ル貴富ナルトキハ貴富ヲ行ヒ貧賤ナルトキハ貧賤ヲ行ヒスヘテ天命ヲ樂ミテ吾レ關ラス

0 005

一志ヲ持スルニハ伯夷ヲ師トスヘシ衣ヲ千仞ノ岡ニ振ヒ足ヲ万里ノ流ニ濯フカ如クナルヘシ衆ヲ容ル、「ハ柳下惠ヲ學フヘシ天空フシテ鳥「ノ飛フニ任カセ海濶フシテ魚ノ躍ルニ從フカ如クナルヘシ

一人見テヨシトスレトモ神ノ見ル「善ラサル「ヲハセス人見テ悪シトスレトモ天ノ視ル「ヨキ「ヲハ之ヲ爲スヘシ一僕ノ罪輕キヲ殺シテ郡國「ヲ得ル「モセス何ソ不義ニ与シ乱ニ從ハンヤ

一心利害ニ落入テ暗昧ナリ世支ニ出入シテ何トナク忙ハシ

一心思ノ外ニ向ツテ人前ヲ慎ムノミ或ハ頑空或ハ妄慮ニ

一順ヲ好ミ逆ヲ厭ヒ生ヲ愛シ死ヲ憎ミテ願ノミ多シ

順ハ富貴悅樂ノ類ナリ逆ハ貧賤患難ノ類ナリ

一愛シテハ生ナン「ヲ欲シ悪ムテハ死セン「ヲ欲ス總ヘテ命ヲ

知ラス

一名聞深ケレハ誠少ナシ利欲厚ケレハ義ヲ知ラス

一已ヨリ富貴ナルヲ羨ミ或ハソヲミ已ヨリ貧賤ナルヲ侮リ或ハ

淡キ才智藝能ノ已ニ勝レル者アリテモ益ヲ資ルヿナク已ニ從フ

者ヲ親ム人ニ問フヿヲ恥テ一生無知ナリ

一物毎ニ實義ニ協ハサレヒ当世ノ人ノ譽ルヿナレハ之ヲ爲シ實

義ニ協ヌルヿモ人譏レハ之ヲ止ム眼前ノ名ヲ求ムルハ利ナリ名

利ノ人之ヲ小人ト云フ形ノ欲ニ從ヒテ道ヲ知ラサレハナリ

一人ノ已ヲ譽ムルヲ聞テハ實ニ過タルヿニヲモ悅ヒ誇リ已ヲ誹

ルヲ聞テハ有ルヿナレハ驚キ無キヿナレハ怒ル過チカサリ非ヲ

逐ケテ改ムルヿヲ知ラス人皆其人ガラヲ知リ其心根ノ邪ヲ知テ

唱フレヒ已獨リ能ク隱シテ知ラスト思ヘリ欲スル所ヲ必トシテ

諫ヲ防テイレス一人ノ非ヲ見ルヲ以テ已カ知アリト思ヘリ人々

自滿セサルハナシ

一道ニ道ヒテ譽ヲ求メ義ニ脊キテ利ヲ求メ士ハ媚ト手ダテヲ以

テ祿ヲ得ンヿヲ思ヒ庶人ハ人ノ目ヲ暗マシテ利ヲ得ルナリ是ヲ

不義ニシテ富且貴キハ浮ベル雲ノ如シトイヘリ終ニ子孫ヲ亡ホ

スニ至レヒ察セス

一小人ハ已アルヿヲ知テ人アルヿヲ知ラス已ニ利アレハ人ヲ傷

ナフヿヲモ顧ミス近キハ身ヲ亡シ遠キハ家ヲ亡ス身滿シテ才覺

ナリト思ヘル所ノ者是ナリ愚コレヨリ甚シキハナシ

昔公ノ小話

延喜帝時渤海國遣使來聘詔賜宴於鴻臚館昔公道眞爲館伴使人擧

三才天地人以求對公應聲曰四端義礼智曰仁字如何公肅然曰謹避

御名是在坡公前百餘年特表出之

0 006

楠公正行ヘノ書置

知人高見志氏ハ肥後熊本ノ人ニテ宮内省ニ奉仕セシカ東海東山
兩道御巡幸ノ際供奉シテ伊勢ニ至リシニ某郷ノ豪族佐野某所藏
ノ品ヲ種々天覽ニ供ヘシ中ニ左ノ書置ノ親筆アリタレハ其文ヲ
寫シテ歸タリトテ示セシヲ此ニ載ス

某今度討死セハ天下ハ尊氏掌握ニ歸ムヘシ然リトテ家ヲ立テ命ヲ助ケ
ん爲ニ彼ニ降參志ス父ヲ一生ノ忠烈ヲ捨ヘカラサル玉ハ碎テモ其
白ヲ改メヨ竹ハ焚テモ其節ヲ毀ヲスト云フ汝能ク思フヘシ其爲
ニ一族郎徒あはれ〳〵の人數附置ぬる上は朝敵寄來る何ノ煩らはし
き事あらん降參不義の行跡ハ大國あま者ノ主となりて家
富榮ゆと何かせむ不義の富貴は大なる恥とせり上へ對し奉り後
めたき行ひ毛頭有ルヲ是を慎モて汝ヲ孝行の第一とせへし
連枝のヒのともと水魚ノ思ひをなして某ニ代りて憐むへし家の
子郎徒を扶助する事必ヲ父か如ニす志自身は富て郎徒ニ辛き

0 007

目見ヲへか云ヲ郎徒ハ主を賴てこそ天下ノ御事ニはあふそかし
八尾の僧正和田恩地をもて父の思ひをなを志毎事母ニ談ヲへか云
ヲ晝夜學文を怠る事なれ義理を能し尋ね究めて文字議ヲるを
強ヲヨヲへからス諸語を暗せん事ハ忽ニすへからス云ヲ
なヲ

延元二年丙子五月

正成

因ニ云フ佐野ハ藤性ニシテ南北朝戰爭ノ頃ロニハ專ラ吉野朝
ニ加擔セシ家ニテ其際拜領ノ品モ多ク天覽ニ入レシト云フ

勾當内侍小話

後醍醐天皇吉野ヘ移ラセ玉ヒシ春山ノ櫻ヲ眺メサセ玉ヒテ勾當
内侍ニ折節ノ移リカハルニコソ昔ノ歌ニ
探しなへて木の芽ヒ春と見へしより花ニ成行三吉野の山

ト讀ミツルヰハ此山ヲモマタ見サリシニイマハタコヽニ住ナレ
テソノ折フシノ戀シク思ヒ出ラルヽハイカニトノタマハスレハ
坐ロニ打嘆キテ
古しへを忍ふ涙ハ三吉野ゝ吉野の山の花の白露
ト奏セラレケルニイトアハレカラセ玉ヒテ折カラ厂ノ通リケレ
ハカク心ナク厂ノ歸レト仰アリケレハ内侍
厂堂ゝ我オを成ハ三吉野の花と見ましてゝかへ良ゆらまし
ト奏シ申ケル
中將姫山居之語
一なんゝよゝゝきやうゝゝゝなられハあいよくのおもひなし
一さいしけんそくなられハ志んいのき奈し
一ひんくうむふくとなれハとうそくれおもひふし
一もぐ志きさう志のミなゝハ志よゝんのこつ良ひを志ゝ
一ひとゝきさうゝんゝちうすれハさうさゝおもひなし
一ちうせゝとゝもしひなられハこたんのつきをゝしひとゝゝ
一志んくんゝひとつうせきゝハごんきやうかくるゝをふし
一旅んふつのきゆうにんなゝハきゆうけうゝのそミなし
一ゝゝゝ志んふゝを見あてまつれハゑもくさうゝのそミふし
一さいゑうとをしといへとゝきゆうすれハがんせんゝらいが
うゝゝ
なゝゝゝゝゝやまのゑくこそ寸みよゝゝくゆきうひとゝとかを
いゝねは

徽宗皇帝畫學試題ノ話

宋ノ徽宗政和中ニ畫學ヲ建設ケ大學校ノ法ヲ以テ四方ノ畫士
ヲメシ試ルニ古人ノ詩句ヲ題トス嘗テ竹鎖橋邊賣酒家ト云テ
試題トス人皆酒家ノ上ニ工夫ヲツケテ形容ス唯一ノ畫士ハ但

橋ノホトリ竹林ノ外ニ一ノ酒旗ヲ掛テ酒ノ字ヲ書ス則酒家數ノ内ニ在ルヿヲ示スヿ甚タ佳ナリ又踏花歸去馬蹄香ト云フ試題ニ人皆形容ナラサリシニ一ノ画士馬蹄ニ數蝶ノ付キテ纏ヒヌルヲ圖セリ香ノ文字ニヨク通シタリコレラ皆選ニ中テ及第シケリ

義人佐倉宗五郎訴狀

午恐奉奏狀御訴訟之事

堀田上野介知行所

下總國印幡郡佐倉組合

八十四ケ村名主百姓共

同國千葉郡千葉組合

七十七ケ村名主百姓共

同國相馬郡布川守屋組合

三十九ケ村名主百姓共

上總國武射郡東金組合

山邊

七ケ村名主百姓共

右下總國印幡郡佐倉領名主年寄百姓共奉奏上候御願ハ当城主御代々ノ内慶長十四年巳酉年ヨリ土井大炊頭御領地ニ罷成御年貢御取箇並夫役其外有來リ候通上納仕勿論村々永荒永引無地高等ニ至リ御慈悲ノ御憐愍被成下百姓農業出精家内養育仕偏ニ難有奉存奉夫ヨリ堀田加賀守信州松本ヨリ寛永十九壬午年佐倉ヘ御所替ヘ慶安三庚寅迄前々御取箇ニ准シ過分ノ増免無御座候夫役小物成共同断ノ義ニテ難有奉存候然ル處翌辛卯四月二十日御逝去ノ後上野介家督相續其年ノ秋御割付御免定ヨリ過分ノ増税御取箇上リ高一石ニ付米一斗二升宛増米御座候事

小物成大豆小豆胡麻糖藁縄等ハ前々有之雜石ノ品々代米被下置

候處当時過役二十九品別紙書ノ通被掛候勿論代米ハ一切不下置
候事
御年米上納ノ儀過分ノ増米過役不下置候ニ付百姓共自然ト困窮ノ
本トナリ御皆済延引奉公人給金竹木代金ヲ以テ之ヲ納メ日限御
取立出役人右ノ譯一切聞入無之役人不情申手錠或ハ縄ニ被申付
候ニハ猶以テ小前ノ取立出來不仕依之長百姓共右糾明ノ御訴訟
ヲ申候ヘハ是又役人同斷ニ糾明被申付嚴敷御催促詮方尽妻子共
ハ他領ヘ衣類又ハ雜具等迯賣代替此金子ヲ以テ納仕候此儀ニ付
出役人不宜非道成儀御座候歟
去卯ノ暮ヨリ増米過役ニテ潰百姓多ク其村ヨリ役所ヘ御訴訟申
上ト雖曾テ御取上無之此義ニ付役人非道御座候依之無是非江戸
上邸ヘ罷上リ候得共江戸表ニテモ國方同樣ニテ決シテ取上ケ無
之候ニ付乍恐久世大和守樣御駕籠ニ就キ奉願上候處兎角國元ヘ
罷歸候テ御救奉請候ニハ被仰渡其國元ニテモ一向御救御用捨無

御座候
増免御取箇過役ノ小物成一ケ年ハ上納仕候ヘ共百姓ノ内所持ノ
田畑村方ヘ差出シ他領ヘ離散仕人數凡七百三十餘人家數百八十八
軒並寺院十一箇寺無住ニ罷成申候田畑高六千餘石村々散田ニ
罷成当時持來候田畑賄ヒ難成之上弥難儀至極奉存候他所ヘ離散
ノ男女渇命ニ及ヒ道路ニ倒レ餓死仕候カ又ハ不覺ノ盜賊ノ類
ト罷成其所ノ役所ヘ被召捕御吟味ニ罷成領主ノ御名ヲ奉穢可申
恐入奉存候其節村處御詮議ノ上村役人取扱悪敷御咎可被仰付候
依之村々是迄殿樣ヘ御訴訟申上候得共曾テ御差引無御座候只今
村々ノ内明村同斷ニ罷成其日ノ夫役相勤不申下賤ノ土民御上モ
不奉恐無是非奉奏上御訴訟仕候御右奏上意趣難澁之儀毛頭不
申村々御慈悲ヲ以何分御憐愍奉願上候以上
承應二癸巳年十二月
又其後宗五ハ堀田家ノ捕フル所トナリ佐倉ヘ禮送セラレ一家尽

ク極刑ニ處セラル其宣告書左ノ如シ

申渡之覺

公津村名主　宗五郎　四十八歳

同人妻　三十九歳

其方儀此度強訴ノ頭取致シ徒黨ヲ組ミ地頭ノ下知ヲ相脅キ江戸ヘ罷出御成先御道筋ニ隱レテ上ヲ不奉恐入罷出直訴ノ科第一久世大和守樣御駕籠ニ就キ乱訴申上候科第二地頭ノ役人共申條不相用難澁申立候科第三村々連判御法度ノ徒黨ヲ結ヒ我意ニ任セ頭仕候科右四ケ條ノ重罪也依テ磔ニ行フモノ也妻儀宗五郎不屆ノ乱訴ヲ企テ常々不存体ニテ其分ニ罷在地頭ヘ難澁申サセ候科不輕依テ同罪ニ申付行フモノ也

申渡之覺

宗平　十一歳

源之助　九歳

喜八　六歳

三之助　三歳

其方儀親宗五郎大法ニ脅キ乱訴頭取致シ御成先ヘ罷出直訴仕候段御上ヲ不奉恐地頭ヘ難澁申掛ケ重々不屆ニ候其科不輕依テ死罪ニ行フモノナリ

八王子五日市ノ風俗

家人北村糾ハ幼少ヨリ山河跋渉ヲ好ミシ者ナルカ一夕談五日市八王子邊ノ人ニ及ヒシニ彼ノ其地方ニ行キシ土地ノ人ハ子守小僧ニ至ル迄絹服ヲ着セリ其故ヲ問ヘハ土地ニテ多ク五日市縞八王子八丈ナト云フ段物ヲ織出シ其織屑ニテ下等品ヲ織リ出セハ反ツテ他ヨリ持來リシ木綿物ヨリハ廉ニシテ且其質ノ強キモ倍スト云フ故ニ皆之ヲ用フルナリト東京ヨリ僅ニ十里ノ地ニシテ東京ニテハ絹服ヲ貴ヒ彼地ハ之ヲ卑シム其懸絶アル此ノ如

シ土産ニ由リ風俗ニ影響ヲ及ホスハ奇ト云フ可シ

熊本人米田虎雄氏ハ維新ノ後侍從長トナリ又武ニ熟達サレシ「メダカノ」ニヨリ陸軍中佐ニ任セラレシ人ナルカ鈎魚ヲ好ムノ奇癖アリ余一日宮中ニ祗候セシ「メダカ」ノ「ヲ話サレタリ同氏モ家ニ數百ノ目高ヲ養フ由其色ハ三種ニテ白赤黑ナリ其枝ハ鯉魚ニ異ナラス唯大小ノ差アルノミ而シテ白キモノト黑キモノトノ間ニナレルハ其色淺黃ニテ赤ト黑トノ子ハ赤中黑點アルモノ或ハ赤黑混合ノモノヲ生ス然ルニ唯赤ト白トノ子ハ或ハ白或ハ赤ト偏シテ混色班點ナシ又之ヲ三四ケ所ニ區劃シテ置ケハ互ニ其境ヲ出テス若シ之ヲ他ノ屯所ニ混入スレハ相戰フテ止マス而シテ同社會ノモノトハ相助クルノ勢アリ其戰長キハ二日間ニ及フ其中ニ威容共ニ備リ自ラ將師ノ任アルカ如キモノアリテ衆ヲ指揮シ部卒ハ其命ヲ受テ奔走スルカ如シ之ヲ目擊セシ人ハ怯ラクハ多カラサルヘシト

モールス氏ノ話

明治十一年ノ頃米國ノ動物博士モールス氏カ東京淺草井生村樓ニテ動物變遷論ヲ講述サレシキ余モ其講筵ニ陪セシカ其後此度ノ米國ニ聞ヘシカハ彼國ノ新聞記者共ハイタク之ヲ駁擊シテ曰クモールスハ元ト漁人ノ子ニシテ常ニ海邊ニ魚介ヲ拾ヒテ遊ヒシモノナレハ少シク其名位ハ知ル可キモ動物進化ノ「ナトハ知ル可キ樣ナク又之ニ騙セラルヽ日本人ハ愍笑スヘキモノナリトアリケレハ其頃留學生タリシ齊藤脩一郎氏ハ之ヲ反駁シ記者輩ハモールス氏ノ漁兒タリシヲ以テ學識ナシト云ヘト記者輩カ日夜信仰スル所ノ耶蘇ハ牧羊者ノ子ナラスヤ漁兒ノ子ハ不學ニシテ牧羊者ノ子ハ尊崇スヘシト豈此ノ如キノ理アランヤ日本人ヲ笑フ記者コソ反テ笑止ナレト書シテ投セラレシニ一人ノ之ヲ再駁セシモノナカリシトソ面白キ話ト云フ可シ

豆腐記

此記ハ正親町從一位前大納言公通卿白玉翁ト稱セシ方ノ作ニシテ或ル隨筆ニ見エタレハ是ニ載ス次ニ掲クル蒟蒻記ハ百花庵宗固カ此記ニ擬シテ作リシモノトカ云フ

それ豆腐はしら形四角四面にして威儀を正しく生き和うして人の交ゐき良われも其身ハ精進潔齋なれ共和光同塵の花鰹に交り諸社の神前にてハ田樂を奏し神慮をきゝ為め奉りまつ春ハ櫻豆腐に祇園林に花ふゝさませ二軒茶屋にかんばしき匂ひと焼あけほのゝおほろ豆腐に歌人の心をいさめ雉子燒の妻戀に珍客の舌皷ひほろ〳〵とう為せ和歌連俳の席に月花ふ心をよせ一興に味に豆腐のゝゝ良ぬ所なしそのかみ六弥太とゝへる武士に岡部と名のり風味にやは良き寒夜に溫飩とうふ瓢簞酒に一座をうこうし唐土にてハ曹子建まめう良ひ焚き豆を煮ふる間に四句に詩をつく良せ兄弟の不和を直し朝夕貴家高僧の列子つ良なり經文讀誦

の聲を布目こゝに聽聞ゝ身ひ油になて齋作時に馳走を催し南禪に入ては禪樂をして葛ゝまりの衣ひ着し旅人を教化し佛緣に引導せしむあ良かなしきう那世くゝり時うつりかゝる重寶の知識を還俗させて奴豆腐とはさて〳〵むげんなる浮世の那

蒟蒻記

知白に黑は老子の教へになん世にこまやくとゝゝふなる物のそに色黑くもゝへゝやゝしきの豆腐の白哲にやわ良うなるをそう良やまゝに彼ハ准南王に系圖自慢に白もみちの風流ありこゝはゝく良の名にも句はゝ只拾遺にものゝ名とせ良れしを身に思ひ出とおもふなるへしこゝ王てハ煮豆の一役をつとめ結ひてハ重詰のゝ志免に此人なくはある色の良ゝゝともてなさるゝも不器量にのゝ名に立て花にもと毛氈に紅にくあゝるゝたそ用ひなきひさなゝ田樂となされてに唐らし辛しにやう〳〵殘る良なき人の

額ニ汗セルノミ師走の月夜女の化粧とかやいふなるやうにあ良て毛むちなる男ぬちねあらはゝ柄まるゝも後ゝいうなる譬やあ良んと韓信ゝ昔しゝ思ひ出らゝ迚ゝもあらゝ實ハこんゝやくゝと呼出て某僧都の好物ゝるゝしゝる形なゝら終ゝ器ゝをり匂るを見セ俵よりうちあらて土間ゝな良へ置ふるいとくちをしされとそのゝみしせ翁のこぬまれしよりさゝ味ハ梅花の清香ゝなそらへ良れゝこそ豆腐の粕の子孫をく迚給へるゝを同してかゝる屋ゝらゝ古き句ゝゝんゝやくもなくてゝなわぬ婆婆世界といひてゝるゝものゝこそをゝしゝ迚

左甚五郎ノ事

彫物ノ古雅ナルモノハ濫ニ甚五郎作ナリトテ名譽高シト雖モ何レ時代ノ人タルヲ知ラス近世奇跡考ニ載スル所ノモノ信ニ近ケ

レハ是ニ掲ク

左甚五郎 伏見人寛永十一甲戌年四月廿八日卒年四十一 左宗心 永祿十五壬午年三月十五日卒年七十一 左勝政 京今出川寺町住享保十二年五月十三日卒

元祿三年訓蒙圖彙ニ天正ノ頃左ト云名人アリ云々亀文翁云甚五郎ハ關東ニ來ラス播州ニ住セシトゾ

泰西画ノ起原沿革 西敬氏ノ説

フリンニー氏カ曰ク画術ノ濫觴ハ往古希臘ニ一少婦アリシカ其情郎ニ別レントシテ戀々ノ情ニ堪ヘス其影ノ閨壁ニ映ツルヲ見テ偶然筆ヲ取リ後ノ記念ニモト映リシ影ノ儘ヲ其壁ニ寫セリ是レ画ノ起原ナリト云ヘリ（此時其父少婦カ影ヲ寫シヽヨリ思ヒ付テ土ニテ其形ヲ作リタリ此偶像ノ初メナリト一書ニ云ヘリ）又或人ノ説ニ據レハ一牧童嘗テ羊ノ地ニ印スル影ヲ寫セシヲ初メトセリト云フ此他異説百端アリト雖モ其源實ニ希臘ノ少婦ニ

起ルト言フノ説信用スヘキニ似タリ何故ナレハ影ノ物ニ映スル明カニ眞正ノ形象ヲ映發セラルヲ以テ偶然此發明ヲ与フル理ナキニ非サレハナリ蓋シ往昔人間必用ノ具稍ク備ルノ後人ノ画術ヲ勉メシ以テ推知スヘシ上古ノ大厦殿堂ヲ見ルニ皆裝飾スル画圖ヲ以テセサルハナシ且世人ノ説ニ據レハ古製ノ後世ニ傳ハリシハ皆石類ニ刻メル画圖ヨリ得シモノナリト云フ此ニテ之ヲ觀レハ古昔ハ文字ニ易ユルニ画圖ヲ以テセシ明ナリ猶此ノ旨趣ヲ明ニセント欲セハ彼ノ「インジャン」(北米ノ土人ヲ云フ)ヲ以テ証ス可キナリ彼レ固ニ無智蒙昧ノ愚民ト雖モ性能ク画ヲ寫ス「我蝦夷ノ「アイノ」ノ如キモ又此ノ類ナリ盆ナトニ工ニ画ヲ刻メルモノ往々アルヲ以テ見ルヘシ」ヲ以テ推ストキハ往古世界ノ人智恰モ今ノ「インジャン」ニ比ス可カリシ世ト雖モ画術ハ夙ク既ニ行ハレシモノナリ故ニ画ハ未開人種ノ間ニ行ハレシ兼テ文字ノ用ヲナシタルモノナリ西班牙ノ人嘗テ「メキ

シコ」ヲ發見セシトキ沿海ノ土人行客ノ形狀ヲ報告スルニ其形ヲ寫シテ之ヲ贈レリ蓋シ土人文字ヲ知ラサルカ故ニ常ニ繪圖ヲ以テ信ヲ通スル猶今日吾人ノ文字ヲ以テスルニ異ナラス「カアペル」ト云ヘル人当時旅隊ノ中ニ在リ人ニ語テ曰ク北亞土人文字ヲ以テ意ヲ通スル能ハサルモ一種画文字ト稱スル者アリ以テ珍奇ノ支ヲ後世ニ傳フト又曰余「ミッシッピー」ヲ發シテ「サッペリヲル」湖ヲ經テ「チトブウエー」ニ至ラントス時ニ其酋トトトト長余カ嚮導タリ彼ノ民「ノードウエブシート」ノ住民ト冠敵タリ故ニ余カ不意ヲ襲ハン「ヲ恐レ河岸ノ樹皮ヲ取リ木炭ニ膽汁ヲ交ヘ(是ハ土人ノ常ニ用フル所ノ者ニシテ恰モ我墨汁ノ如シ)画ヲ作リテ其冠敵ニ贈ル画ハ初メニ「ヲタコーミース」ノ都ヲ画キ次ニ獸皮ヲ着セル人ヲ左方ニ画キ其口ヨリ線ヲ引テ「チトブエー」ノ記号ナル鹿ノ形ヲ画キテ其口ニ結付タリ其意蓋シ「ノードウ

ブシー」ノ人タルヲ示スナリ又其後ニ於テ此ノ川ニ泛ヘル一隻ノ舟中ニ帽子ヲ戴ケル一個ノ人丼ニ布ヲ以テ頭ヲ裹ミ船端ニ倚テ櫓ヲ取ル人ヲ画ケリ是レ余輩丼ニ佛ノ從僕ヲ示スナリ其他種種ノ形体ヲ画キ又船首ニ平和ノ烟管ヲ加ヘ平和ノ烟管トハ亞米利加土人ノ用フルモノニテ和睦條約ヲ結フトキ互ニ喫烟シテ盟ヲ爲スセノ故ニ是名稱アルナリ」「ヲタゴーシイス」ニ在ル「ノードウエブシー」ノ酋長答書ヲ「チードウエー」ノ酋長ニ贈リテ左ノ旨趣ヲ述フ

9

余輩今怨ヲ結ヒ互ニ仇視スト雖モ今回ハ盟テ卿等ヲ路ニ擁スルノ悪意ヲ懷カサルナリ余輩モ亦卿等ニ請フ英人某ハ嘗テ我カ地方ニ來遊スル者ニシテ余輩其恩遇ヲ負フ少ナカラス故ニ今卿等ト共ニ其歸ルヲ送ラントス

ト知ルヘシ画ハ文字ノ一種ニシテ而シテ能ク意ヲ通スヘキノ具ナル」ヲ

敬云我南部ノ僻陬文字ヲ解スル者甚タ鮮シ故ニ盲目暦ト稱スル一種ノ暦ヲ作ル始メヨリ終ニ至ル迄絶テ文字ヲ書サス皆画ヲ以テ其意ヲ知ラシム譬ヘハ稲刈ヨシ某月某日ト云ヘルニハ束稲ノ傍ラニ鎌ヲ画キ田田ノ如キ形ト錢五箇ヲ画ク此ハ十月五日ト云フ意ナリト余久シク此ノ暦ヲ藏ス然レモ其意解シ難キ者十中七八ニ居ル頃日南部人ニ親シク問フテ稍其半ヲ解セリ聞ク今猶盛ニ農家ニ行ハルト此レ又前文ノ一証ト爲スニ足レリ

以下美術ノ漸次世界ニ擴布セシ原由ヲ述ヘシ

今熟々「エジプト」ニ存スル古蹟ヲ歴觀スルニ尖塔或ハ十字標殿堂「スピンキス」「女面獸身ノ神像等ノ如キ物」ヲ存スル枚挙ニ暇アラス其創立ノ時代ニ作ルモノト云ヘリ是レ未タ文字ノ制アラサル時ニ先ツ」幾何ナル」ヲ知ラス然レモ今日人民ノ智識上ニ於テ此國ニ於テハ偶像ヲ尊信スルノ習盛ニ行ハレシナリ

故ニ今日存スル所ノ者ハ靈禽靈草靈獸ノ形ヲ摸スル者及ヒ其狀甚奇異ナル者多シ思フニ此ノ國ニ於テ美術ノ速ニ擴布セシハ偶像ヲ信スル心ニ基ヒセシ者ニシテ又此ヨリ其進歩ヲ妨ケシナリ「エジプト」ニ於テハ元來木乃伊ヲ作ルノ風習盛ニ行ハレキ(木乃伊ハ尸ヲ割キ臓腑ヲ去リテ藥物ヲ其中ニ盈シメ其形ヲ長存セシムル者ヲ云フ)人此ニ由テ万象ヲ摸スル大イナル便利ヲ得タリ此レ實ニ美術ノ楷梯ヲ与ヘシナルヘシ苟モ神トシテ尊信スル所ノモノハ人体ヨリ禽獸草木虫魚ノ屬ニ至ル迄皆木乃伊ト爲シテ貯藏セシナリ現ニ「エジプト」ニ存スル古昔ノ彫像ニ摸セシモノニ外ナラス其人ノ祖先又ハ其尊敬セル勇者及ヒ禽獸草木ニ至ル迄苟モ人民ノ尊信スル所ノ者ハ皆此レヨリ彫像ニ摸スル風習ナリシカ其技巧ミニ至ルニ從テ其風漸ク一變シ專ラ想像ノ形体ヲ摸スルノ陋習ヲ生セシナリ(想像ノ形体トハ人類獸身ノ者或ハ人頭魚身ノ如キ者ニテ千手觀音ノ如キ類ナリ)前ニ述フ

ル如ク偶像ヲ尊信スルノ弊次第ニ甚シク地名ニ命スルニモ其地ニ鎮坐スル偶神ノ形体服飾等ヨリ取レリ「イスレール」人「カナアン」人ト戰ヒテ利アリシ「ヲ」ヲ記セル條ヲ讀ムニ足目國千手國魚身國ノ名稱アリ蓋シ其地ニ鎮坐セル偶神ノ形ヨリ名クル者ナリ之ヨリ推考スル時ハ当時想像ノ形像ヲ作ルノ陋習此ニ於テ盛ニ行ハレシヲ知ルヘシ

希臘ニ於テハ久シク埃及ト交際ヲ通セシヨリ隨テ画術モ漸次此國ニ傳播セリ是ヨリ益改良シテ逐ニ精工ヲ極ルニ至ル此國早ク文明ノ域ニ進ミシカハ美術ヲ尊フノ風大ニ行ハレ上ノ好ム所下之レヨリ甚シク技術ヲ修ムル者ハ皆競ヒテ名譽ヲ文場ニ博セン「ヲ」勉メタリ而シテ此國原來大ニ風景ニ富ミ且人物美ニシテ骨格甚タ整ヘルヲ以テ人物風景皆此ノ好臨本ヨリ寫セルカ故ニ風致自ラ具ハリ今世ノ名工モ却テ及ハサル者アリ希臘ノ美術ニ長セシ「想ヒ知ルヘシ然ルニ文化ノ弊漸次ニ柔弱ニ流レ終ニ羅馬

ノ制御ヲ受ルニ至リ國政大ニ衰滅シ殿堂ノ裝飾ハ羅馬ニ奪ハレ画工ハ徒ラニ遊廊ヲ作ルノ役ニ服セリ是ニ至テ世界ノ技術ハ全ク移ツテ羅馬ニ集マリ頗ル盛ニ行ハレシカ國政傾クニ從テ此技亦漸ク衰ヘ後數十年間ハ殆ト睡眠セル者ノ態ヲ成セリ千三百年代ニ至リ福楞西(フローレンス)ノ人「シマブー」ナル者希臘ノ画工ニ從ヒ學ヒ古ヲ溫子往ヲ探リテ此技ヲ佛蘭西ニ移セリ此時ニ至テ画術ハ再ヒ世ニ出シカモ癈絶年久シキヲ以テ能ク着色ノ法ヲ知ル者ナク用品モ從テ一變セリ故ニ當時ニ於テ專ラ證ヲ取シ者ハ羅馬ノ「アルドウブランディン」ニ存セル「アルドウブランディン、マレージ」ト名ケシ一画ノミ羅馬ニ遊ヒシ人ノ此画ヲ見シヨリ大ニ工夫ヲ用ヒテ漸ク其一班ヲ摸スルヲ得タリ此画ハ今尙現在スル所ハモノニテ實ニ二千年前ニ画キシモノナリ画術ノ大ナル進歩ヲ得シハ油画ノ發明アリシニ因レリ麻布ニ油ヲ用ヒテ画キ初シハ千四百年代ノ始ニ戎伴大克ト云ヘル名工ノ

工夫ニ因レリ其後人々之ニ習フテ益ス其極点ニ至リシナリ元來此法ニ由ルトハ光澤着色嘗テ變スル丶ナク且ツ數篇画キ改ムルモ敢テ画面ヲ損スルノ憂ナシ故ニ之ヲ反覆シテ充分ニ意匠ヲ尽スヲ得ヘシ且ツ數色ヲ和スルニ皆意ノ欲スル所ノ如クナラサルハナシ

一說ニ戎伴大克ノ以前已ニ油ニテ画ケル者アリト云ヘリ又「ホウレース、ウアルポール」氏ノ画譜ニ曰ク油画ノ法ハ伴大克ノ前已ニ英國ニテ此法ヲ用ヒシト云ヘリ又曰ク千百年代ノ頃ニ「テチヒラス」ト云ヘル人書庫ノ中ヨリ一書ヲ得タリ中ニ画家麻油ヲ用ヒテ画ヲ描ク丶及ヒ油漆ヲ製スル法ヲ載セタリト云ヘリ伴大克ハ設令眞ニ此發明者ナラサルモ此人ノ工夫ニヨリテ種々ノ色料ヲ作リ始メシヨリ一層ノ進歩ヲ与ヘタルハ疑ヲ容サル所ナリ其レヨリ後千五百年代ノ中頃ニ至ツテ木板彫刻ノ發明アリシヨリ又一層ノ進歩ヲ起セリ此術ハ福楞西ノ金工

「マスソウ、ヒニキウラ」ノ發明ニ依レリ此技大ニ精巧ニ至リシニ由テ名工ノ画ケル者及ヒ彫像ノ如キハ皆印刷シテ廣ク天下ニ傳ヘリ之ニ由テ世人ノ眼目ヲ開キ名工ノ名又四方ニ傳播セリ此名譽ヲ得ルノ榮アルヲ以テ終ニ競ヒテ画術ヲ講究シ以テ今日ノ精妙巧緻ヲ極ムルニ至レリ

象戲ノ駒ノ銘

象戲ノ駒ノ銘ヲ水無瀨家ニテ書スル支ハ水無瀨一齋ヨリ始マレリ一齋名親具高倉永家卿ノ三子水無瀨兼成卿ノ養子ナリ卿後氏成ヲ得ルニ至リ薙髮シ一齋ト稱ス書名アリ豐臣秀次公囑シテ駒ノ銘ヲ書セシム書体判然識別シヤスキヨリ銘ハ一齋ニ限ルトシ德川氏ニ至リ銘書ハ水無瀨家ニ限ルモノトナリシトソ

因云王ノ一ヲ玉ニスルノ譯ハ国ハ閉門略閉ハ王ニ對スル字地ニ二王ナシ一ハ必ス閏ナリト云フノ義ナリト又云王將トハ疑ハシキ名ナリ王ナレハ王將ナレハ將ト云ヒ王ト將ト混スルノ理ナシ諸書開祖宗桂ヨリ四代迄双方共玉將トス故ニ玉ヲ大將トシ金銀ヲ副將トスルナラン左スレハ金銀將ノ名一入面白クハ覺フ

門松、鏡餅、万歳、初夢、并ニ七福神ノ

上古ノ俗ノ神祭ハ大概屋傍ノ庭上ニ常盤木ヲ挿テ神座トシタリ歳始ハ就ニ神祇ヲ祭祀ル國風ナルニ依リ毎戸其門頭ニ神座ノ蒼樹ヲ設タルヲ門松ノ源始トス此支ノ書ニミヘタルハ延喜ノ頃惟宗孝言ト云シ人ノ正月ノ詩ニ鎖門賢木換貞松トアル自注ニ世俗皆松ヲ以テ門戸ニ挿メリ而ルニ余ハ賢木ヲ以テ之ニ換タリ故ニ云フト本朝無題詩ニ見タルヲ最モ古シトス故ニ其始ハ只松枝ノミ門戸ニ挿タリシヲ後ニ至リ常盤ノ色ト云祝意ヲ表リテ竹ヲ立添又雪霜ニ凋マヌ義ヲ採テ齒朶樸葉ノ類ヲ飾着ケタル者ナリサテ定家卿西行俊惠法師等ノ歌ニ門コトニ立ル小松又門松ヲイト

ナミ立ルナト詠ミ兼好法師ノ徒然草ニ大路ノサマ松立ワタシテ花ヤカニト記シタルカ如キハ全ク当今ノ狀ト同シク見フレハ此風ハ七百年ニ近キ昔ヨリ其儘存レルナリ西洋ニテモ祝日ニ綠葉ヲ以テ門ヲ飾ル風アルハ其俗ヲ殊ニスルモ常盤木ヲ以テ家門ノ榮ヲ祝フ意ハ暗合ト云ヘシ

鏡餅トテ歳始ニ餅ヲ鏡形ニ造リ神祇ニ備ヘ身ニモ祝フ」アリ是古キ慣習ナリ今モ土ニ依リ歳始ニ家内長幼ノ次第ニ順ヒ大小ノ餅ヲ製シ各其餅ヲ戴キテ後雑煮餅ヲ食スル風アリ此ヲ一ツ重ヲタルハ陰陽ニ象リ夫婦親子ニモ比セシモノト云ヘリ又齒固ト云ハ往昔禁中ニ於テ正月元日御厨子所ヨリ御臺ニ」本ニ餅大橘押鮎鯉鳥鹿猪瓜漬茄漬等ヲ備ヘ御齒固ト稱シテ獻リシ故實ニ記レリ齒固ト稱スルハ此等ヲ食シテ年ヲ延ヘ齡ヲ固ムル義ナルヘシ此ハ禁中ノミニ非ス縉紳ヨリ庶人迄此儀ニ倣ヒ鏡餅ヲ祝ヒシ狀ハ源俊頼ノ齒固ノ折敷ノ敷物ニ書付ル歌トテ「我チノミ世々ニモ

チヒノ鏡餅咲サカヘタル影ソ寫レル」トアルヲミテ知ル可シ又今世雑煮トテ餅ニ大根芋昆布菘等ヲ交ヘ羮トシ喰フモ此齒固ノ遺風ナルヘク蓬萊餅喰積トテ三方ノ臺ニ海老熨斗昆布榧橙穂俵等ヲ置テ賀客ニ供フルモ古ヘノ齒固ト唐土ノ春盤トヲ混シテ歳始ノ節物ニ用ヒ來レルモノナリ

万歳ハ往昔禁中ニ於テ正月十四日ヲ男蹈歌十六日ヲ女蹈歌ト稱ヘテ男女ノ舞人清涼殿ノ庭上ニ於テ舞曲ヲ奏シ終ニ必ス万歳樂ト唱フル詞アリシニ本ツク中頃千秋万歳ト云フ舞伎ヲ作リ出タルヲ略メ万歳ト稱ヘルナリ足利ノ世代ヨリ以來其舞人烏帽子素襖ヲ着シ皷ヲ打チ早歌ヲ唱ヘ正月毎ニ禁中ヘモ柳營ヘモ推參スルヿトナリ近世迄大和國窪田箸尾ノ兩村ヨリ專ラ其人ヲ出シタリ三河万歳ト云ハ一種別流ニテ其始ノ唱歌博學ノ聞ヘアリシ三河守大江定基ノ作ヒ又梶原景時ノ孫ナル無住法師ノ作ヒ云ヘリ故ニ万歳ハ朝廷ノ公支ヲ基トメ一種ノ伎トナリ後世終ニ賤民糊

口ノ資トナリタルナリ

正月ノ初夢ハ西行法師ノ歌トテ「年クレヌ春來ヘシトハ思ヒ寢ノ正シクミエテカナフ初夢」ト夫木抄ニ載タレハ古キ稱ト云フ可シ此初夢ニ付宝船ト唱ヘテ正月二日七福神ノ乘リタル船ノ繪ヲ枕頭ニ敷テ寢ル風俗アリ此ハ民間ノミナラス近世迄初夢ノ料トテ船画ヲ旧年晦日ノ夜禁裏ヨリ宮方及ヒ諸臣ニ賜ヒシ〕アリ此起源詳ナラスト雖思フニ漢土ノ紙船ノ風ヲ傳ヘシ者ニテ最古キ〕ニハ非ルヘシ但シ今世其繪上ニ記セル〔永キ夜ノトフノ眠リノミナノサメノ歌ハ既ニ漢土ノ全揃兵制〔足利ノ世ノ頃ノ撰著〕中ノ日本風土記ト云フ書ニ見ヘタレハ彼廻文ノ体ニテ旧クヨリ傳ヘシナリ〔或ハ琴ノ譜ト云フ説アリ〕是レニ福神ヲ画キタルハ民間ノ習ハシナレト因ニ七福神ノ概ヲ云フニ先ツ弁財天〔或ハ吉祥天ニモ換タリ〕昆沙門天ハ佛經ニ所謂天部ノ神ニテ專ラ諸人ニ福德屋与フル神ナリ大黑ハ佛經ニ福德自在ノ神ナル

由ヲ説キ梵語ニ摩訶迦羅天ト云ヒテ諸寺ノ厨ニ其像ヲ安置シタル形狀恰モ我朝ノ神代ニ大巳貴命ノ袋負トナリタリシ古支トヨク似テ且大國主ト云フ一名ノ大黑ハ大國ノ音ト通ヘルヨリ此神ニ由緣アル鼠ヲモ書ソヘ逐ニ一種ノ神トナリシナリ福祿壽ハ福祿壽星ト云フ星ノ化身壽老人ハ南極老人ヒ稱ヘテ共ニ支那ノ道家者家者流ノ口實トノ鹿及ヒ亀鶴ヲ此二仙ノ像ニ書ソヘ衆人司命ノ一軸ナリトノ壽老人ノ手ニスル如キ皆唐画ニ基ケリ布袋ハ支那ノ岳林寺ニ寄宿セシ僧ニテ小兒ヲ愛セシ人ナル由委シク三佛傳ニ見ユ幸福ヲ司トル者ナラ子ト其形体腹膨服且兒輩ヲ多ク率ヒタルヨリ此員ニ加ヘタルカ惠比須ハ全ク本邦ノ神ニメ蛭兒又支代主神ヒ彦火々出見命ヒ云傳ヘリ此神ハ攝州西宮ニ鎮座アリ衆庶ノ信仰淺カラヌニヨリ終ニ福神ノ内ヘ加ヘタルナランサテ七神ヲ幷列シタル原ハ狩野家ニテ古ク七福神遊戯ノ圖ヲ繪キシヨリ起リタル〕ニテ狩野松榮〔足利ノ時代ノ人〕ヨリ古キ

物ヲミスト谷文晁モ云ヘリト

救荒一助

土ハ何方ノ土ニテモ砂石ノ少ク土質ノ美ヲ擇ヒ土一斗ニ水四升入レ能ク攪動シ上水ヲ去ㄱ數遍又水ヲ入レ如前攪動シ別桶ニ入レ底ニ殘ル砂石ヲ去澄シ三日間一日二三遍宛攪動シ上水ヲ替ル也葛粉ヲ製スル法ノ如シ如右製セシ土ヘ水二升入レ煮テ食モヨシ一日二三合ヨリ五合迄食ヘシ誠ニ此法ヲ用ヒハ五穀ヲ食セサルモ飢ヘス身体強ク健カナリトス

土ヲ食物トスル實驗

土ヲ食物トスル實驗ハ靜岡縣士族井上如水氏ト東京府士族磯村勝兵衛氏カ嘉永年間旧幕府ノ命ヲ奉メ蝦夷ヲ巡回セラレシ時波靜ノ最寄「ウンラ」ノ西海岸ノ山ヨリ出ル延胡索（エンコサク）形チ芋ニ似タリ（ト又食土（土人エベトイト云フ此土色白クメ小麥ノ粉ニ似タリ）ノ二種ヲ混合メ海獸ノ油ヲ以テ煮テ食ハレシニ其味至ツテ淡薄ナリシト云フ土人ハ是ヲ常食トス

前條二件前年載テ讀賣新聞ニ在リ又大ニ世ニ益アラント思ヒ此ニ掲ク

二宮尊德ノ話

下野眞岡ノ里ニ旧幕府縣令ノ公廨アリ弘化嘉永ノ頃二宮尊德通稱ヲ金次郎ト云フ屬吏此ニ在任ナシタリキ此人ハ相模ノ産ニシテ幼時父母ニ別レ伯父何某ニ養レタリシカ夙ニ農政貨殖ノ道ニ志シ一日農家ニ行キ一握ノ早苗ヲ請來リ自ラ荒蕪ノ地ヲ拓キ之ヲ植付シニ豈圖ンヤ收納ノ日ニ至テ數合ノ米ヲ得タリ是ニ於テ氏ハ復之ヲ植付シニ數升ヲ得タリ如此スルㄱ數年終ニ數石ヲ得ルニ至リ伯父ニ請テ其家ヲ分テリト時ニ小田原藩主大久保氏之

WED. OC
十一月 (水)

ヲ聞キ試ミントセル折柄大久保氏ノ支族ニ宇津某ナル者アリ年久シク家計窘迫シ負債月日ニ積累シ殆ト支持シ難キニ至リ幸ニ二宮氏ニ命シ其采邑野州物井村ト云フ高四千石ノ地ナリニ差遣シ民政ヲ委任セリ二宮氏ハ其地ニ赴キ即チ躬親ラ率先シテ耕ヲ課シ地ヲ闢キ力田ヲ賞シ遊惰ヲ戒シメ政ヲ爲スヿ十餘年ニメ邑主村民共ニ贍給饒足シ其封内ニ一人モ所ヲ得サル者ナキニ至ル今人其村ニ至リ見ルニ纔ニ村境ニ入レハ則チ道路ノ修潔ナリ禾稼林木ノ鬱蔚ナル劃然トメ他邑ト觀ヲ異ニセリ既ニメ之ヲ幕府ニ推挙セル者アリ幕府即チ民務ノ吏員ニ列シ眞岡ノ公廨ニ居ラシメ終始地方ノ吏ニ從ハシメ其功績枚挙スルニ暇アラス是ニ於テ近國ノ諸侯稍ニ其名ヲ傳聞シ延テ民政ヲ諮詢スル者多カリシソカ中ニ奥州中村ノ邑主相馬氏ハ二宮氏ヲ倚信スルヿ尤モ篤ク藩政民務ヲ專委シテ毫モ疑フ無ク尊德死亡ノ後モ百吏其遺法ヲ確守シ前後二十有六年ノ間米穀ヲ増殖スル凡ソ二十五万五千俵荒蕪ヲ墾闢スル凡一千四百丁孝悌力田ヲ賞スル凡金七千兩窮民ヲ扶助スル凡一万五千俵其他溝澮ヲ疎鑿シ道路ヲ修繕シ各村ニ米廩ヲ創メ地方ヲ尽シ德政ヲ布ク至ラサル所ナク竟ニ僻隅蕞尓ノ貧藩ヲメ殷富ノ樂土ト爲サシムルハ實ニ二宮氏ヲ任用スルノ效ナリシ故ニ明治六年三月朝廷相馬氏ノ請ヲ充シ尊德ノ孫金一郎ナル者ニ現米三百二十石ヲ賜ハリ其殊勳ヲ褒美セラレタリ二宮氏容貌愨美朴野ノ一老翁ナリシ且其身微賤ニ生レ書ヲ讀ミ道ヲ講スルナク文字ハ僅ニ日用ヲ弁スルニ足ルノミ然リ而シテ德行ト勉強トノ厚キニ因リ往ク所吏業ノ成ラサルナク風ヲ移シ俗ヲ易フルニ至ル耳晩年篤ク儒教ヲ好ミ常ニ書生ヲ自家ニ延キ四書五經ヲ讀マシメ聞テ會意ノ所ニ至レハ反覆沈思シ之ヲ躬行ニ徵シテ終身遺失セサリシト其平常用ル所ノ帳簿ニ大學中庸論語等ノ平實ニメ遵行スヘキモノヲ綱文ノ如クニ大書シ其下ニ金穀ノ盈縮田畝ノ興廢或ハ戸口人蕃ノ増減ヲ縷載シ恰モ普通ノ計算簿ノ如クナル

チ見テ踐履躬行スル所ノ聖人ノ語ニ符合スルモノアルヲ知ル可シ

蠅取草ノ話

東京大學ニテ生物學ヲ專修シタル理學士岩川友太郎氏カ植物學ヲ講シ蠅取草ノ處ニ至ル氏曰ク此草ハ原名ヲ「ヴエナス、フライトラツプ」ト稱シ米洲地方ニ產ス其能ク蠅其他ノ小虫ヲ捕ヘ其血液ヲ吸取スルヲ以テ此名アリ此ニ付一ノ奇談アリ彼有名ナル英國ノダルウキン氏生物博士ハ種々ノ試驗ヲセントテ米洲ヨリ齎シ來リ初メ小虫ヲ其上ニ置シニ忽チ之ヲ密抱シ人手ヲ加フレヒ開カス其液汁ヲ吸收シ尽ノ再ヒ之ヲ開ク其小虫ハ全ク乾涸シテ毫モ液汁ヲ止メス次ニ牛肉ヲ以テ之ニ加フルニ前ノ如ク然リ是ニ於テ木片白墨ヲ之ニ投セシニ一旦ハ之ヲ密抱スト雖モ忽チ之ヲ開キ木片白墨更ニ異狀ナシ之ヲ以テ見レハ其食シウヘキヤ否ヲ察知スルカ如シ故ニ氏ハ之ヲ植物ノ感覺アルモノトシ感草ノ名ヲ與ヘタリ生物學士中此草ノ動植何レニ歸スルカヲ爭テ決セサルモ皆此ノ二種ノ作用ヲ爲スニ由レリ又奇ナラスヤト

大德寺亀鑑

京都洛北大德寺ハ禪宗五山ノ一ニハ非サレト臨濟宗別派ノ本山ニシテ京都屈指ノ大禪刹ナリ三百年來余家ノ菩提所ナルカ本堂ノ左室ニ一額面アリ其記スル所頗ル益スル所アラント思ヒ左ニ錄ス

亀鑑

昔者慈明在汾陽時与大愚瓊瑯等六七人結伴參究鴻東苦寒衆人揮之明獨通宵坐而不睡自責曰古人刻苦光明必盛大也我又何人生無益干時死不知子人於理有何益卽引錐自刺其股後嗣汾陽道風大振号河獅子近世白隱鶴老一撞朝著此話喟嘆曰此眞是也苟不知此不可謂眞參學於是乎志氣憤發晝參夜參孜々不休唯道是究後來其道奔走天下龍

象其德聳動王侯大人逐扶起宗風五百年間出之稱焉嗚呼如是用心如是修習何道不成何德不滿二三子努力吾道裡更無一句籠絡汝諸人但寫此兩件以爲亀鑑苦夫會中指揮有頭首在或誤違越擯斥無宥古語有之法令無親令人念之

右

正證円照禪師示衆亀鑑

明治六癸酉年　山主白

一里塚ノ始

徳川三代將軍ノ諸國旱シメ死スル者數ヲ知ス別テ往來ノ旅人道ヲ去アヘスメ死セリ是ニ由テ土井大炊頭利勝侯將軍ノ意ヲ得テ往還筋道ノ左右ヘ松ヲ植サシメ大ニ旅行ノ助トナレリ然レ共行先モ松原ノミニテ旅人ノ退屈センヿヲ思計リ重テ大炊頭ノ心ニテ一里塚ト云モノヲ築キ一里宛ニ拵ヘ置ナラハ然ル可ランサレモ松ハ彼

道端ノ並松トマカリモス可キ間如何スヘキヤト伺ヒシニ大炊頭申所尤モ至極当レリ一里塚ニハ餘ノ木ヲ植ヘヨト申サレシニ大炊頭老年ニテ耳遠クアリケレハ餘ノ木ヲ榎ノ木ト聞誤リ榎木ヲ植シメラル今ニ一里塚ニ榎木ヲ植ルハ此故ナリトソ

蜀山人一話一言ニハ

一慶長年錄ニ慶長九年極月六日將軍家被仰出諸街道ヘ一里塚築可申旨右大將ヘ被仰越則諸代官ニ被仰付道中ニ是ヲツキ道ノ兩方ニ松ヲ植可申旨自右大將家本多佐太夫永井彌右衞門奉行被仰付東海道東山道ヨリツキ初メ候

一慶長九年東海道東山道北陸道一里塚奉行被仰付

永田勝左衞門　重眞

第一　右重眞ハ当時幾三郎家ノカノ家ニ御書ヲ藏之ト云フ左ニ

就路中一里塚申付太田勝兵衛永田庄左衛門差遣候何レノ知行方之内タリト云共彼奉行次第人足可出之者ニ

七月朔日御朱印

曾呂利新左衛門話

秀吉朝鮮ヲ征スルヽ今日御渡海アルヤ明日御渡海アルヘシヤナド世上風説セシカハ堺ノ鞘師曾呂利新左衛門ト云ル滑稽者鞘ヲ製スル丿上手ニテ何成鞘ニテモソロリトアンバイ能ク刄這入ルトテ字ノ曾呂利ト呼レシモノナリサレハ其頃彼カ戯歌ニ

太閤ゟ一石米を買兼て今日をごとゝゝ明日を御渡海ト申ケルヲ秀吉傳ヘ聞カレ大ニ憤リテ曾呂利ヲ召サレテ糺シケレハ落首杯ハ昔ヨリアル習ナレハ上ヲ憚ラサル所モ是非無レハ許可シ我

今一天ノ君ヲ補佐シ奉ル所ノ關白職タルヲ太閤カトハ過言甚シ責テハ太閤ノ杯ナラハ少シハ許ス所モ有可キニト嚴シク怒リケレハ曾呂利少シモ恐レスメ曰君ト天子トハ何レカ尊クヲハシマシ候哉ト申ケルニ夫知レタル丿ニテ我ハ臣下ナリイカテ天子トヒスル丿ノ有可キヤト曾呂利曰然ラハ左ノミ怒リ玉フ丿有ヘキヤ已ニ天子ノ御支サシテ君ケ代ハ君カ爲ナリヽト申ニテハ候ハスヤト申上ケル故其秀才ヲ深ク愛セラレ此後ハ太閤ノ傍ニ侍メ御伽ヲナシ色々面白キ滑稽アリ曾呂利已ニ病重リ今ハニ及ヒシヽ何成共望アラハ申セカナヘテ遣サントアリシカハ

御威勢ヲ三千世界手ゟ入ゑは極樂淨土我ゟ給はれ

ト御請メ其後程ナク果タリトカヤ又曾呂利太閤ノ出頭タリシヽ太閤ノ近習ノ輩曾呂利ヘ尋子テ申ハ御邊誠ニ君ノ思召ニ叶ヒ類ナシ如何シテカハ此ノ如クニ御意ニハ入ルソヤ我等共御側ニ勤テ居レト動モスレハ御怒ヲ蒙ル丿有此支貴方ノ傳授ニアツカラ

ント云ケレハ曾呂利曰毎日飯ヲクヒ玉フヤト答テ毎日食フト云フ飯ノ風味ハ何ノ様ナル物ニヤト問フ又答テ云斯ト定リタル味ハ無レ只甘キ物ナリト曾呂利又菓子ハ甘キ物ニヤト答テ曰甘クメアマシ曾呂利然ラハ飯ハ定リタル風味モ無レハ明日ヨリ飯チヤメテウマキ甘キ所ノ菓子計食ヒテ居玉フヘシ彼者聞テソレハ一向ニナラヌ了ナリト云フ曾呂利大ニ笑テサレハノ了也貴邊ハ菓子ヲ以テ君ニ進メ我ハ飯ヲ以テ君ニ進ムル故ニイツ迄モ飽ルヽトイフ了ナク甘キモノハ時宜ニヨリテアシク飯ハイツニテモヨキ物ナリ併シ何モ甘キ風味ハナシ貴方ハ心ニ甘キ所ヲ以テ君ノ用ヒ玉ハン所ヲ期スル故大ニ了簡違ヘリ我ハ飯ハサマテノ風味モナキ物ナレ氏退屈シ玉フト云氣遣ヒナル了ナキヲ支トス春ノ寒キト秋ノ暑キト年寄ノ健カナルト君ノ寵愛トハ必ス久シカラヌモノナレハ其心ヲ以テ媚ス諂ハスメ眞直ニ奉公シ玉フヘシ外ニ傳授モヘチマモイラスト申ケレハ彼侍モ納得シ大ニ歡ヒ歸リケルヲ門口ヨリ呼返シカマヘテ飯ノ了忘レ玉フナ菓子ヲナナ食セテ出シ玉ヒソト申ケレハ彼男腹ヲ抱ヘテ歸リケルトソ

東照公遺訓

人ハ一生ハ重荷を負て遠き道を行ふ如くにして急くへからす不自由を常とすれ不足なし心に望を起るは我より困窮なるものと思ふへし堪忍ハ無事の基ひ物ヲ怒ハ敵きと思へ勝事はかりを考りて負る事を知るは身を害するに至る己れを責て人を責るな何事も及はさるは過たるよりまさるなり

コハ人ノ皆知ル所ナレ氏實ニ千古ノ金言氏云フ可キモノナレハ此ニ錄シテ以テ遺忘ニ備フ

固体膨脹ノ實用

理學士和田雄次氏カ嘗テ理學會ニテ熱學講議ノ際膨脹力ヲ實用

0 28

シテ非常ノ功ヲ奏スルヿアリ佛國ニ「アルシーブ」ト云フ博物場アリ嘗テ其塀ノ外面ニ傾斜セシニ一學士ハ固体膨脹ヲ實用シテ之ヲ復セント發言ノ果シテ實功アリシト云フ其方法初メ塀ヲ鉄棒モテ之ヲ挾ミ兩端ハ螺旋ヲ以テトメ酒精燈ヲ以テ之ヲ熱セシニ棒ハ爲ニ非常ニ膨脹セリ此ヰ螺旋ヲ強クシ頓ニ燈ヲ去リケレハ棒ハ外部ノ冷氣ニ觸レテ忽チ收縮シ其反動ノ力ニヨリテ塀ヲ旧ニ復スルヿ容易ナリシト云フ實ニ其力ノ洪大ナル驚クヘキナラスヤト陳述セラル